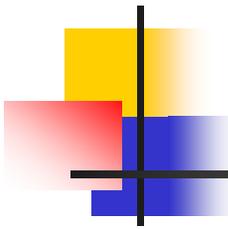


Neuroethics Neil Levy

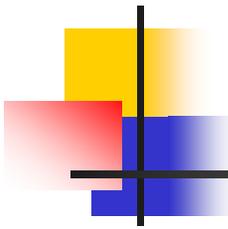
Chapter 3: The presumption against
direct manipulation (pp.88-103)

磯部 太一



第3章前半 (pp.88-103) の概略

- The Treatment/Enhancement Distinction
治療/増強の区別をどのように行うのか、という問題に対しての導入部
- Enhancements as cheating
増強を「不正」という観点から考察する
- Inequality
増強を「不平等」という観点から考察する
- Probing the Distinction
上記の考察を手掛かりとして、具体的に治療/増強をどのように区別すれば良いのかについて、主要な2つのアプローチから議論を行う



The Treatment/Enhancement Distinction

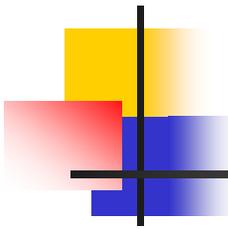
-Is Enhancement Luxury?- p.88

- 治療と増強の区別はどのようにすればいいのだろうか？

- 治療・・・病気の治療

- 増強・・・通常の状態(能力等)をさらに強める

⇒やはり増強は治療に比べ、贅沢なのだろうか？



The Treatment/Enhancement Distinction

-Moral Significant- pp.88-89

- 「治療」 or 「増強」の区別は、道徳的な意義の違いを表しているという意見は一致
- 治療/増強の区別は、医療倫理にその伝統がある
- 次節以降の話題
 - ・「不正」としての増強
 - ・「不平等」としての増強

Enhancements as cheating

-Enhancement with Ritalin- p.89

- Beth・・・リタリンを服用し、自分の能力を増強
- Billy・・・Bethのように増強はしていない

⇒試験において、BethはBillyよりも好成績をとるとしたら・・・

Enhancements as cheating

-Enhancement with Ritalin- p.89

⇒ BillyはBethが不正をしたと思うだろう

日本では、つい最近
ADHD等への処方
が禁止された！



Enhancements as cheating

-drugs for aged people? - p.90

- 年配の人々の病気を治療することにはほぼ異論はないだろう(e.g.アルツハイマー薬)
- ただ、その薬を通常の状態の人が、増強に使えば問題が生じる(e.g. GABAの研究)
- 通常の人々向けの「増強」市場の巨大さ

Enhancements as cheating

-the situation of society- p.91

- 抗鬱薬を服用した通常の人々は、社会的により成功している
- Billy-Bethの例で言えば、Bethが成功したのはルール内ではあるが、彼女はルールの精神を犯したといえる

Inequality

-poverty v.s. wealthy- pp.92-93

- 貧困 or 裕福の不平等
- なぜならば、新しい増強は実際には、裕福な人々しか使用できないから
- イメージ：
裕福⇒増強⇒裕福⇒増強⇒裕福……………

Inequality

-Is the Poor Natural Slaves?- p.93

- 増強が可能な社会を仮定すると、裕福な人々は、貧困な人々を生まれながらの奴隷だと思っている
- 裕福な人々は、遺伝的・環境的な幸運を授かっている
- ということは、貧困な人々はその逆、つまり遺伝的・環境的な不運を背負っている

Probing the Distinction

-two main approaches- p.94

- 2つの主要なアプローチ
 - ①「病気」と「病気でない」という対比によるアプローチ
 - ②種の典型的な機能(通常の機能)の概念によるアプローチ
- しかし、これらのアプローチでも、倫理的議論へ訴えるような独立の基準を得ることはできず、ただ道德化された基準だけしか得られない

Probing the Distinction

-Treatment & the disease-based approach- pp.94-95

- 治療・・・病気や障害の治癒や、その進行を止めたりする医療的介入
⇒しかしこれでは、病気と他の望まれない状態の区別が不明瞭
- 「病気」という視点からのアプローチでは、病気や障害が実際に認識されるよりも幅が広い

Probing the Distinction

-the species-typical functioning approach- p.96

- 治療・・・患者に通常の機能を回復させることを目的とした医療的介入

Why?

- × 通常の機能とは、本質的によいもの
- 通常の機能は、平等な機会のために必要

Probing the Distinction

-baseline capacity- p.96

- 「種の典型的な機能(通常の機能)」からの見解によれば、個々人に彼/彼女達の能力を回復させることを目的とする

⇒その能力は、生来的に彼/彼女達のもの

Probing the Distinction

-bad luck- p.97

ということは、

⇒知性、外見、運動能力の欠如は不運によるもの

⇒他の人(周囲の人)は負い目を感じる必要はない

そして、

⇒彼/彼女達の基準(遺伝的に与えられた)よりも上を目指すことが、治療ではなく、増強である

Probing the Distinction

-natural baseline p.97-

- しかしこの見解では、病気や障害の「自然な基盤 (natural baseline)」との差異を明らかにしなければならない
⇒これは生物学的に無意味である

Why?

⇒ということで、しばし表現型を構築する遺伝の機能を考察する

Probing the Distinction

-genetic determinism- p.97

- 遺伝的決定論では説明できない
 - 遺伝子の保有と表現型形質の発達は、複雑な関係にある
 - 表現型の影響は、環境や他の遺伝子との相互作用の結果である
- ⇒ 遺伝的要因だけではすべては決まらない

Probing the Distinction

-no natural baseline- p.98

- ということは、遺伝という観点から考えると、
⇒我々が出発点を決めるような「自然な基盤」は存在しない
(∵環境や他の遺伝子との相互作用も影響する から)

Probing the Distinction

-unjust history- p.100

- 環境は「自然」という根拠ではなく、「形質の分配」という根拠から公平か不公平かが決まる
- 「能力の不公平はそれ自体で不当なものなのだろうか？」

それとも、「能力の不公平は、不正な差別の歴史の産物である限りにおいて、不公平であるのか？」

Probing the Distinction

-social and political power- pp.100-101

- 社会・政治的選択は認知能力の分配に影響
- 知力測定
- 影響を与える要素
 - ① 良い栄養 ② 良い教育 ③ 環境の良い改変
(e.g. ネズミの実験)

Probing the Distinction

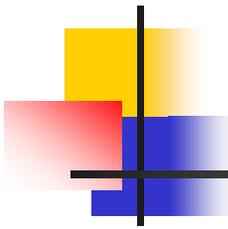
-all cases may be enhancements- p.102

- 「自然な基盤 (natural baseline)」というものが分からないとすると……
⇒ 広く捉えれば、被験者がよりよい状態になれば、それらは全て「増強」ということもできる
(e.g. 学習して知性を得ることも然り)

Probing the Distinction

-environment or allergies?- p.103

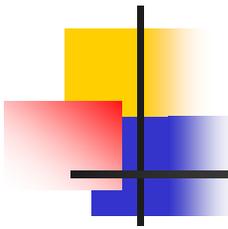
- 同じ状況ならば、子供のアレルギー治療をするよりも、子供の環境をスタート地点から豊かにしてあげる方が重要である
(その子のアレルギー治療が人生に大きな影響を与えるのなら話は別だが……)



結論とまとめ

p.103

- 道徳的判断にとっての独立した基礎としての治療/増強の区別は断念すべきである
- それよりもむしろ、程度が深刻であり、欠損(欠乏)が介入を正当化するのに、充分意義のあるものであるのかどうかを問わなければならない
- 次節以降においては、直接操作についての異論反論について考察していく(次回のゼミにて)



Thank you for your kind
attention and discussion!!
